

「東大英語」に隠された 大学入試改革のエッセンス

グローバル社会をリードする人材育成を見据え、従来の「知識偏重型」の大学入試を改革する動きが進んでいます。しかし、長年、数多くの東大受験生の指導にあたってきた、駿台・英語科専任講師 大島保彦先生によると、東大入試はそもそも「知識偏重」とは対極にあるといいます。その理由とは何か、またグローバル社会を生きぬくための「本質的な学力」を身につけるにはどうすればよいのか、教育専門家の森上教育研究所・代表森上展安氏と語り合っていました。



「東大英語」はなぜ、語い数が少ないのか

森上 文部科学省が、入試選抜改革を打ち出し、今、大学入試は大きく変わろうとしています。受験生の能力を丁寧な選抜方法によって、多面的・総合的に評価しようという姿勢のなかで、とりわけ英語については、グローバル化時代に対応できる人材育成に向けて、「読み・聞く・書く・話す」の4技能を評価できる出題が求められています。

大島 実は、「東大英語」の語い数は少ないのです。というよりも、このような入試をめぐる環境の変化を踏まえて、最難関である東大の英語入試（以下、「東大英語」）を見ると、東大はグローバル化に対応できるような力を求めていると読み取れるでしょうか。

そもそも単語数という概念がないと言った方がよいでしょう。

東大英語では、与えられた問題文の文意を理解し、それを出題者が納得するように伝えることのできる力が求められています。少ない語い数のなかでいかに工夫し、表現できるかという言葉の運用能力が試されているといえます。

これは、帰国子女が海外の学校に順応するプロセスや、小学生が算数で方程式を使わずに問題を解くプロセスに似ています。帰国子女は異国で異なる文化や価値観に直面し、困難な状況をいかに打開するか考え、克服していきます。小学生もまだ方程式を習っていないなかで、つるかめ算などを使って工夫して文章題を解いている。東大を受験するような生徒も、中学はもとより、予備校や塾で自

分よりはるかに、できる生徒に囲まれてカルチャーショックを受け、なんとか彼らと伍していきます。

「困難は人を鍛える」と言いますが、東大ではこうした過酷な状況に対応できる力を持った、タフな学生を求めており、それを入試を通して確かめようとしていると言えるでしょう。

英語4技能の学習は、**「関係」と順序がポイント**

森上 近年、私立大学を中心に、TOEFLやTOEICなどの外部試験を活用する動きが目立っています。入試改革によって、これまでの「読む」「書く」に加えて、「聞く」「話す」力、いわゆる英語4技能を重視することに対応した流れだと思えます。では、英語4技能のバラ

ンスを測るために、今後、「東大英語」は変わっていくのでしょうか。

大島 結論から言うと、東大英語は既に入試改革を先取りしているため、変わることはないと言えるでしょう。

グローバル化時代で生き抜いていくためにも、英語4技能は、大学入学後も高めていかなければなりません。東大英語は、見た目の4技能を試していません。それよりも、入学後、4技能をより伸ばしていくための土台となる英語力があるかどうか問われているのです。この土台づくりのためには、「読む・聞く・話す・書く」の4技能相互の関係を踏まえた学習が必要ですよ。

「東大英語」は近年、リーディングを重視しながらも、リスニングの比重が高まっています。実際、受験

生自身のリスニング力は高まっており、それに伴って問題も徐々に難化しています。リスニング力といっても、例えばニュース番組のスクリーンを読むことができれば、内容を聞き取ることもできないわけで、その点で、東大英語ではリスニングは「耳で聞く速読」と位置づけられていると思っています。

こうしたリスニング力の土台があれば、スピーキングは大学入学後の学習で留学対応レベルの力は養えるため、「東大英語」ではあまり重視されていません。

ライティングについては、英語と日本語と「内容」の三者の緊張関係を、柔軟に捉える力が求められています。一方で、さりげない内容を、スイッとすくいとって英語に置き換えるしなやかさ、他方では、純粹に日本語的な発想を英語的発想へと切り替える力強さです。

知的冒険心がなければ「合教科・科目型」の学びは形骸化する

森上 このたびの入試改革では、複数の教科を組み合わせた「合教科・科目型」の出題も求めています。教科横断型というのは、特定の知識に偏らない幅広い教養、すなわち「リベラルアーツ」につな

るものと言えるでしょう。東大はもともと1〜2年生を教養課程とし、リベラルアーツ教育に重点を置いていると思いますが、それは入試にも表れているのでしょうか。

大島 先日も授業で話したのですが、2003年度センター試験の現代文、2010年度慶應大医学部の英語、2013年度東大の現代文、そして今年度の「東大英語」では、いずれも人間が目や耳から得た情報を脳がどう処理するかというテーマが扱われています。これらの問題は専門知識が問われているのではなく、受験生に科目間の垣根を超えた教科横断的な脳の使い方、汎用性の高い脳の使い方ができるかを求めていると言えます。

東大をはじめとする難関大学や医学部では、こうした知の最前線を出題してくるから問題を解いていても楽しい。さらに、さまざまな教科の要素が組み合わさった問題は各教科の持つ文化ともいいうべきものが感じられるし、通常の問題を解く時とは違った脳の使い方が求められると話すとき、成績の良い生徒ほど食いついてくる。

彼らは、通常の正攻法の問題よりも、むしろ科目と科目の間にある学際的なスキマ問題、おまけ

のような問題ほど面白がつて解く傾向があります。このような知的冒険心に基づく学びが、結果として多岐にわたる幅広い教養につながってきます。こうした生徒の知的冒険心を喚起する学習こそ、まさに「アクティブラーニ

ング」であり、裏を返せば形だけのアクティブラーニングは知の活性化につながらないと言っています。

森上 受験生は、知的冒険ができる知的好奇心あふれる生徒、特定の知識だけに偏らない普遍的な脳の使い方ができる生徒を求めているという、「東大英語」の狙いを理解したうえで、学習に臨む必要があると言えますね。

目先の入試改革に惑わされず、出題者との対話を楽しめ

森上 お話を伺っていると、「東大英語」が既に、4技能の重視、受験生の能力や意欲を多面的・総合的に評価するための選抜方法の工夫、といった今の大学入試改革の一步先を行っていたことがよくわかりました。

考えてみれば、入試問題は大学入学後、引いては将来、社会で求められる力を踏まえて出題されているわけで、単なる知識の丸暗記で通用するような問題を課すべくもないわけです。

では、毎年、東大をはじめとする難関大学に多くの合格者を送り込んでいる駿台では、変わる大学入試に対してどのような対策を取り、指導をされていますか。

大島 駿台では、以前から入試改革を見越し、教科の枠を超えた普遍的な学力が身につけられるように、生徒の知的好奇心を刺激し、学習意欲が高められるようなカリキュラムを組み、指導を行っています。



森上教育研究所 代表 森上 展安氏

profile
岡山県出身。早稲田大学法学部卒業後、進学塾塾長などを経て、1988年に私立中高や学習塾を対象とするコンサルタント「森上教育研究所」を設立。現在は同研究所の代表を務める一方、受験や中高一貫教育についての豊富な情報と経験を生かし、評論・分析の分野でも活躍。近著に「10歳の選択―中学受験の教育論―」（ダイヤモンド社）、ほかにも「中学受験入りやすくお得な学校」（ダイヤモンド社）などがある。

ます。また、英語4技能を重視する入試への対策や大学入試改革に対応するセミナーも生徒向けだけでなく、中高の教員対象にも開いています。

駿台の指導の本質は、生徒に「知的な刺激」を与え続けることです。授業は、その絶好の場となっていますと自負しています。また、駿台には全国から難関大学突破をめざす精鋭が集まっています。駿台の授業でノートの取り方、学習に対する姿勢などを見て刺激を受けること、これが生徒に与える影響は計り知れないものがあります。

海外赴任が決まった駿台出身の企業人から「駿台の授業を受けた時のカルチャーショックに比べたら、世界のどこへ行こうと怖くない」という言葉をもらい、とてもうれしく思いました。

森上 東大だけでなく、駿台も既に大学入試改革の一步先を行く指導を行っており、そこで数多くの生徒が大きな知的刺激を受けているということですね。

これから大学をめざす生徒には、目先の入試改革の動きに惑わされず、知的冒険心を高め、入試では出題者との対話を楽しむくらいの気持ちで臨んでほしいと思います。



駿台 英語科専任講師
東大進学塾エミール 英語科主任
大島 保彦先生

profile
群馬県出身。東京大学大学院博士課程(比較文学比較文化)満期退学。著訳書に研究社・平凡社・東大出版会・青土社・駿台文庫などから出版。